

武田勝頼軍のあっけない崩壊

当時天下人になれるもっとも近い戦国大名として武田信玄があげられていました。

信玄は、当初信長やその同盟国の徳川家康とは同盟を結んでいたのですが、破棄して、家康の領域の三河国、遠江国の東部を攻めます。京を目指していたとも言われます。

三方ヶ原の戦い等、勝ち続けていたのですが、思いがけないことが起こります。遠征途中の陣中で信玄が病没してしまい、遠征軍は甲斐に引き上げます。

天正元年（1573年）のことです。

さてここからが本題です。

信玄の後継は四男の勝頼です。

長男は信玄に勘当され死没、次男は盲目で三男は夭折で、四男の勝頼が後継に決まっていたのです。

勝頼は、信玄が滅ぼした信濃国の諏訪氏の姫と信玄の間の子です。

勝頼は織田信長に対抗して直接には二度対戦して二度大敗して二度目の対戦で武田家は崩壊して滅亡してしまいます。

一度目は長篠合戦と言われており三河国（愛知県東部）の北側の設楽ヶ原で織田信長・徳川連合軍に大敗します。

そして7年後の1582年（天正10年）に織田軍と徳川軍の一斉攻撃で壊滅して武田家は絶滅します。自壊と言って良いでしょう。

敗戦はみじめなものでした。

統治領の信濃国や駿河国では十数の城の城主のほとんどが自落（戦わず逃げる）又は城内で裏切りがありで開城して投降してしまいます。

一つの城は一日持つか持たぬかです。

1582年（天正10年）2月3日に開戦で3月11日に勝頼夫妻と嫡男の

信勝が自刃します。

平安末期から鎌倉、室町、戦国時代と続いた甲斐の国主・守護大名で源氏の名門武田家は滅亡したのです。

信玄の嫡男の勝頼は凡庸な人物だったのでしょうか、基本的な戦略、戦術に又家臣団や領国統制に重要な失敗があったのでしょうか。

勝頼の武田家の統治は信玄の死の1573年から信長軍に敗れる1582年（天正10年）の9年間です。

この間の勝頼の活動の概略と武田軍団崩壊の原因を探ってみたいと思います。

先に崩壊の基本理由です。

○長篠合戦（設楽原の戦い）で大敗して、信玄以来の重臣の多数を戦死させました。（1575年—天正3）

重臣の勇将が対戦に反対したにも関わらず戦闘し大敗で、その重臣の戦死はその後の武田軍団の戦力減退させ、勝頼の権威失墜の方向へ向かいます。

○上杉謙信が病没（1578年—天正6）した後跡目相続で甥の景勝と養子の景勝（北条氏政の弟）争いで武田勝頼は景勝に味方して、武田と上杉で同盟を結びます。景勝が争いに勝ち景虎は自刃します（1579年）。謙信の後継は景勝となります。

これまで結んでいた武田家と北条家の同盟は破綻します。

勝頼は上杉景勝と北条氏政とを天秤にかけ上杉景勝を取ったのです。

北条家の当主で景虎の兄の氏政は武田・上杉連盟に対抗して徳川家康と同盟を組みます（1579年—天正7）

この結果、勝頼は西よりは徳川家康に東からは北条氏政に挟撃され、遠江国の東部（静岡県西部）と駿河の東部と伊豆（静岡県）・相模国境で防衛に苦戦します。

上杉景勝は対信長で北陸方面での戦力の張り付けで、北からの関東の北条攻めは出来ません。

勝頼の北条への戦いは外に上野（群馬県）で武田の単独での戦いとなり、上杉は北条への戦いの役に立ちません。上杉の同盟は有効に働きません。

○勝頼と信長の第1次和睦交渉

徳川と北条を敵まわし、上杉が役に立たない情勢の中で、信長本軍に攻められたらたまりません。勝頼は信長に使節を安土城に送り和睦交渉をしようとした。使節は天正7年＝1579年10月から1580年3月まで安土で待ちましたが信長には面会してもらえませんでした。

この間信長は、対武田をにらみ、北条氏政と同盟を結びます（1580年－天正8）。

これで西からは信長と家康連合、東からは北条氏政で武田領国（信濃、甲斐、駿河、遠江の東部、上野）は挟撃される形となります。

信長はいよいよ石山本願寺に対しては優位に展開、毛利への侵攻を進めます。

加賀（石川県）、能登（石川県）を支配し、越中（富山県）の上杉領にも侵攻します。

○勝頼と信長の第2次和睦交渉

1580年8月に勝頼は信長の嫡男惣領の信忠に第2次和睦交渉を持ちかけます。

しかし話は進展しません。

この年1月三木城の別所長治を自刃させ、4月には本願寺の顕如が降伏し、毛利領への猛攻勢が始まります。

信長にとってもう武田と譲歩して和睦する相手ではありません。

勝頼にしても信長の総攻撃を受ければ勝ち目はないと考えていたでしょう。

1581年（天正9年3月）には人質にっていた信長の五男信房を返します。

しかし信長から何の反応也没有。

無償で大事な交渉の玉を渡してしまったのです。何とか交渉に応じてもらいたい思いからです。

しかし和睦交渉には応じてもらえませんでした。

注 信濃（武田領地）と美濃（織田領地）との国境近くにある岩村城主（織田方）の遠山氏に信長が幼い息子信房を養子に出していたが、戦いの中で信房を武田信玄に人質に出してしまい、武田家で育てられた人

○重臣の不満

勝頼は参謀として近臣の長坂 釣 閑斎^{ちょうかんさい}と服部勝忠を重用します。二人の戦略に重臣たちや信濃国の国衆（武田家の外様家来）の反発がありました。

次に崩壊の直接原因を見てみます。

○高天神城^{たかてんじんじょう}の干し殺し

遠江国の武田の重要な拠点の城です。しかし徳川軍は城を囲み、城への糧道を絶ちます。城兵は飢えます。数百人の餓死者がでます。それでも勝頼は援軍を派遣しませんでした。落城します。

味方を見殺しにしたのです。

勝頼はこの城での決戦を避け、信濃国での決戦を目論んだのです。

しかし味方から信用を落とします。

○裏切り、謀叛の読出

信長軍は自領の美濃（岐阜県）の東側から武田領国の信濃国（長野県）の西部への侵攻します。（1582年＝天正10年2月3日）

そこが織田軍と武田軍の主戦場となります。

武田軍防禦のためのいくつもの城があり、城兵が守っています。

先ず、信濃国の西部の木曾善昌が裏切り次に信濃国のほとんどの城の城主が戦わず逃げるか、織田軍に味方する者もいます。

そうです。城主もほとんどの侍が勝頼に謀反、裏切りをしたのです。

抵抗した主力の高遠城^{たかとおじょう}も一日で落ちました。内部で裏切りが出たのです。何故こんなに裏切りが出たのかです。

信濃国の軍勢の多くは元々は武田家の家来でなく信玄の時に征服されて家来になった者で武田家に恩義が薄いこと、織田軍の勢力の大きさを感じたこと、それに最も大きい理由は上記高天神城に援軍を出さず、味方を見殺しにした勝頼の仕打ち、おまけに戦いで死ぬのではなく餓死させたことはい

つ自分の身かと思ったでしょう。

更に身内や譜代の臣から裏切りが出たことです。

親類で譜代筆頭の穴山梅雪や小山田昌信です。

この二人の裏切りも決定的です。穴山は駿河方面で勝頼以外では最大の軍団を持っています。

小山田には勝頼が織田軍に甲斐で追い詰められた最後に裏切られます。

織田信長もその外の戦国大名もそして勝頼本人もこんなに簡単に敗戦するとは思いませんでした。

大きな戦いは二回ほどありましたが、2日程で負けます。

敗戦は味方の裏切りによる、自壊、自滅と言えます。

勝頼統領の下で9年間甲斐軍団は遠江、駿河、上野で激しく戦って来ました。徳川との遠江では苦戦、駿河の国境では北条と互角、上野では戦果も上げました。

これまで身内、譜代、外様の家臣の裏切りはありませんでした。

後世、なぜこんなに簡単に負けて滅亡したのか批評します。

敗戦の原因について上記の内致命的な失敗は何なのか。一つではなく原因は複合しているのか。

それとも信長全国制覇の下で、武田勝頼の武田家には存続の可能性はもうなかったのか。

織田信長は武田家はもとより、毛利家も上杉家も同盟を結んでいた北条家も絶滅させることを考えていたとの説もあります。

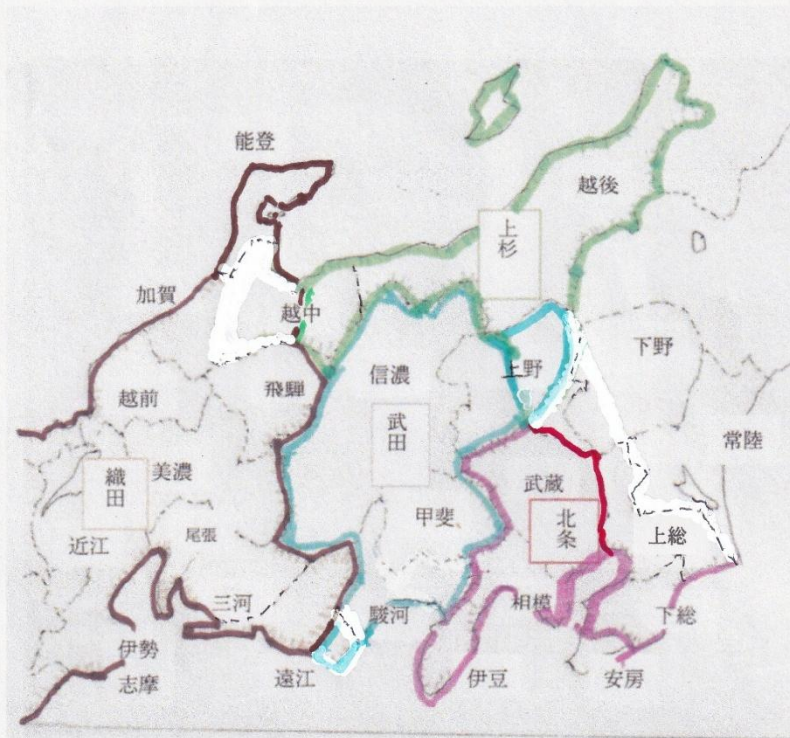
戦国の時代に天下取りを期待され、本人も意欲ある大大名の生き残る道は険しいのです。

その後、信長は明智光秀に謀殺され、北条家も豊臣時代に滅亡し、上杉家と毛利家は徳川天下の下でお家は縮小しながら生き残りました。

以上

2025年8月13日

梅 一声



関東・中部の戦国大名勢力図 (1581年)